

# 名古屋大学グローバル・リーダー育成プログラムの試み

名古屋大学国際交流協力推進本部 特任准教授  
留学生センター 特任准教授 (2013年3月31日まで)

田 所 真 生 子

名古屋大学国際交流協力推進本部 特任講師  
教育学部・教育発達科学研究科 留学生担当教員

渡 部 留 美

## 要旨

過去3年にわたり実施してきた「名古屋大学グローバル・リーダー育成プログラム」実践の試みと成果・課題について報告する。まず、過去2年間の実施報告とそこから見出された課題について述べる。次に、2012年度に新たに加えたプログラム内容(MEIPLES)を紹介し、1年間をとおして参加した学生へのフォローアップ調査の結果と考察を提示する。本プログラムで目的としていた、学生の多文化理解能力・コミュニケーション能力の養成、国際社会で活躍できる能力の養成、課題達成能力の養成について、ある程度達成されたと思われる。今後の課題としては、安定したプログラムの提供と学生の能力を更に伸ばすための継続性のあるプログラムの企画があげられる。大学のプログラムとして予算化し、広く広報することにより、より多くの学生の参加が可能となり、グローバル・リーダーの養成が実現する。また、プログラムの参加が在学中や卒業後にどのように活かされていくのかについてもフォローアップが必要である。

## キーワード

グローバル・リーダー、体験学習、多文化理解、ファシリテーター、コミュニケーション

## 目次

はじめに

1. 目的・背景と IF@N の概要説明
2. 2012年度の MEIPLES について

3. 学生へのフォローアップ調査の結果と考察
  4. まとめと今後の課題
- おわりに

## はじめに

現在、グローバル化はいたるところで大きな流れとなっており、キャンパスに集う学生にもグローバルな視点をもった人材の育成が求められている。日頃から国際交流に対する意識を高め、「内向き志向」と呼ばれる日本人学生の海外派遣促進や海外留学を終えて帰国した学生の力をさらに伸ばし活躍する場を提供することも重要であろう。名古屋大学では、これまでも様々な国際交流活動を展開し、そのような活動に主体的に参加している学生をサポートしてきた。今年度は新たな試みとして、名古屋大学で学ぶ外国人留学生や日本人／一般学生が、国際社会において指導的な役割を果たす人材として活躍するために必要な総合能力を育成することを目的とし、新しいタイプの「名古屋大学グローバル・リーダー育成プログラム」実施を試みた。本稿では、その実践の試みと成果・課題について報告する。

## 1. 目的・背景と IF@N の概要説明

「名古屋大学グローバル・リーダー育成プログラム」は、留学生センターアドバイジング・カウンセリング部門が過去数年間実施しているもので、これまでワークショップなどを実施してきた。2010年度からは、学生が主体となって企画・運営する国際学生フォーラム(通称 IF@N)を開催することになった。年度の後半に

学生実行委員を募り、学生がフォーラムの企画・運営を経験することで、グローバル・リーダーに育てようという試みである。担当は、留学生センター高木ひとみ（2010年度企画段階のみ）、田所（2011年度より担当）、国際交流協力推進本部虎岩朋加（当時）、渡部である。

開始にあたり、2010年度初めに、担当者（以下、コーディネーター）によるミーティングを数度重ね、日程・場所、学生実行委員の集め方や人数、コーディネーターの役割などについて詳細を詰めていった。第一回目のIF@N実行委員には11名の応募があった。IF@N（International Forum at Nagoya University）という通称や全体テーマである「出会う、繋がる、広がる」もこの年のミーティングで決まった。第1回IF@Nは、12月12日（土）に実施した。当日は、23名の参加があった。第1回のメインテーマは、「世界へ踏み出す私たちの第一歩」で、5つの分科会が持たれた。

2011年度は11名の実行委員が集まり、うち2名が第1回から引き続いての実行委員であった。第2回IF@Nは、11月12日（土）に実施した。当日は、35名の参加があった。第2回のメインテーマは、「共生～地球という一つの国で～」で、5つの分科会が持たれた。

コーディネーターにとって2年間は試行錯誤の連続であった。ただ、実施していくうちに課題や改善点が見えてきた。一点目は、実行委員としての基礎力である。実行委員の多くが、チューター、留学、ヘルプデスク、コーヒアワー参加などの国際交流活動経験者であったが、企画、運営することに慣れていない傾向がみられた。ほとんど互いに知らない者同士が実行委員として集まり、わずか、2～3ヶ月でフォーラムを企画、運営するのはどれほど国際経験が豊かであっても至難の業ともいえる。IF@N実行委員会を立ち上げる前に、知識やノウハウが蓄積できる研修やセミナーが必要であると考えた。二点目は、コーディネーターの役割である。IF@Nは、学生が主体となって実施する「学生の学生による学生のための」フォーラムであり、そこが一般の授業とは異なる点で「売り」ではあったが、大学が主催する限り方向付け、教育的支援が必要である。コーディネーターは毎回のミーティングの場に顔を出す、進行の途中で実行委員のアイディアについてどの程度コメントや意見を出すか、実行委員にとってコーディネーターがどのような位置づけにあるべきか、については、常に頭にあったが、これとい

う解答が出ないままに進んでいた。三点目は、ミーティングの形式である。開始当初は二週間に一回程度のミーティングを想定していたが、実際に始めてみると、週に二回集まらなければならないときもあり、かなりハードなスケジュールとなった。ミーティングに欠席した者に対しては、あとでメールリストで議事録をまわして確認してもらうようにしていたが、実際にミーティングに参加しなければ理解できないことも多々あり、情報共有のフォローアップの必要性を感じた。四点目は、実行委員のメンバーのほとんどが毎年入れ替わるため、前年度からの引き継ぎがなされにくいことであった。従って、まるで架空のIF@Nを想像しながら実行委員が一から手探り状態で準備するといった状態であったといえる。ただ、第2回の実行委員はこの経験から、第3回の実行委員のためにミーティング議事録、ポスター、報告書などあらゆるファイルをデータとして保存し、さらに、各担当者がその役割と準備内容などをまとめたファイルを作成してくれ、このおかげで第3回の実行委員にとっては、大きな助けとなった。

過去2回の実践からコーディネーター間で出された課題をまとめると以下ようになった。

- ・学生主体の活動にコーディネーター（教員）がどのような立ち位置で関わるのか
- ・異なるスタイルを活かしどのように協働していくのか
- ・スケジュール調整が難しい実行委員間の意思疎通や情報共有をどのように上手く行っていくのか
- ・日本語を母語とする者でも追いついていくのが難しい状況で、いかに留学生にも配慮しつつ、多文化グループで共同作業を進めていけるのか
- ・グローバル・リーダーに必要な能力やスキルを身につけてもらうにはどのようにすればよいのか

## 2. 2012年度の MEIPLES について

過去2回のIF@Nの経験をもとに浮かび上がった課題や改善点から、より包括的なプログラムに発展させる必要性が示唆され、今年度のプログラムを企画・実施するに至った。そのために、コーディネーターが何度もミーティングを重ねプログラムを練っていった。そして、従来のIF@Nに数回のセミナーの実施を加え、通年のプログラムとすることとし、“Meidai

Program for Global Leaders” から“MEIPLES（メイプルズ）”という通称を付けた（以下 MEIPLES）。

そして、活動を通して、以下のような効果を得られるようプログラムを構成した。

#### ①多文化理解能力・コミュニケーション能力の養成

多文化理解能力・コミュニケーション能力を身につけ、多様な背景を持つ人々との関係作りに関心や自信を持ち、学内外での国際交流活動や海外留学等、国際的な活動に積極的に参加するよう動機付けること

#### ②国際社会で活躍できる能力の養成

自己理解や他者理解を深め、自信を持って自分の考えを表現する力を身につけ、広い視野で自分の学生生活やキャリアを築いていく力を高め、積極的に国際社

会で活躍できる能力を養成すること

#### ③課題達成の能力の養成

長期の協働活動を通して課題達成の能力を養う他、今後の大学生活及び卒業後に活躍する上で必要な人的ネットワークを築くこと

MEIPLES は大きく二期に分けられる。前期ではグローバル・リーダーに必要な知識やスキルを体験的に学ぶためのセミナーを6回行った。学習と同時に、学生間のチームビルディングを図れるようにデザインした。後期では、前期に培った知識とスキルの実践編として IF@N を位置づけた。前期セミナーの詳細を表1に示す。

表1 MEIPLES 前期セミナー概要

	ねらい	内容
5月23日 第1回：キックオフ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本プログラムについて理解する</li> <li>・国際交流、本学の留学生、コミュニケーションスタイルについて基礎知識を得る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己紹介</li> <li>・レクチャー「国際交流基礎知識“留学生と日本人のコミュニケーション”」</li> <li>・MEIPLES 紹介</li> </ul>
6月6日 第2回：異文化コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーション・ギャップの体験から、文化には固有の習慣や価値観があることを理解する</li> <li>・異文化に接するときの構えを考える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・レクチャー「文化とは何？」</li> <li>・体験アクティビティ：「あいさつがわからないーひょうたん島物語」</li> <li>・レクチャー：「異文化に対する構え」</li> <li>・グローバル・リーダーのためのコミュニケーションのコツ：Email 編～初級～</li> </ul>
6月27日 第3回：自己発見と他者理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アクティビティを通して、自己発見や他者理解を深める</li> <li>・身体（心体）感覚に触れる</li> <li>・「聴く」ことの大切さを理解する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アイスブレイク：バースデーライン</li> <li>・アクティビティ：“Yes, but”と“Yes, and”</li> <li>・レクチャー：「聴く」ことについて</li> <li>・アクティビティ：自分のユニークさを見つめる→伝える・聴く・見守る・受け取る</li> <li>・レクチャー：「ジョハリの窓」</li> <li>・グローバル・リーダーのためのコミュニケーションのコツ：ディスカッションで使える手法：KJ 法</li> </ul>
7月14日 第4回：阿部先生による公開ワークショップ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分を知る、身体感覚とつながる、ヴィジョンング</li> <li>・多様な背景の仲間と共同作業をしていくための心構えやスキルを身につける</li> </ul>	<p>パーソナル・リーダーシップ～異なる文化を受け容れるための6つの習慣～</p>
8月1日 第5回：問題解決、体験学習ラボラトリー方式の体験	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問題解決体験学習で何を学ぶことができるか体験をとおして知る</li> <li>・問題解決体験学習を通して、その過程で起こるさまざまなことがらに気づく</li> <li>・グループ活動のダイナミクスとプロセスについて考える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・レクチャー：「体験学習の循環過程」「プロセスとコンテンツ」</li> <li>・体験アクティビティ：問題解決学習「ハッピー・ファーマーズ」</li> <li>・レクチャー：「プロセスを理解するために：指摘と分析のツール」</li> <li>・グローバル・リーダーのためのコミュニケーションのコツ：アイスブレイクの方法</li> </ul>
8月29日 第6回：実務を学ぶ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・セミナーや会議の企画、開催などに必要な実務スキルを学び、企画・運営能力、協働する能力、実務能力などを身につける</li> <li>・実際に模擬ミーティングを行い、企画の体験を試みる</li> <li>・後期に実施する「学生フォーラム」（第3回 IF@N）を企画する実践力を養う</li> </ul>	<p>前回の振り返りと模擬ミーティング</p>

このセミナーでは、レクチャーも行うが、体験的な学びを重視した。体験学習の助けとなる学習ジャーナルを導入し、毎回最後に学びや気づきを内省する時間を持った。学習ジャーナルは、心に残ったこと、自分の考えや感じたこと、人との関わり、学んだことを書いていき、意識化して表現し可視化することで、自己の作業や考えを振り返り、他人との関係構築を行う等、学びを日常の中に定着させる目的がある（津村・山口, 2005）。自分の学びや成長の軌跡であり、ポートフォリオにもなる。

第4回には一橋大学より阿部仁先生を招きワークショップを行った。公開ワークショップとし他大学にも募集をかけ26名の参加者があった（名大生15名、他大学生7名、他大学職員4名）。

MEIPLESには学部生、修士課程、博士課程、研究生合わせ、15名（留学生8名）の登録があったが、途中で辞めた者、欠席等を含め、平均して毎回10名ほどの出席であった。前期終了時、後期 IF@N 実行委員としての活動を継続する意思の有無を確認したところ、数名の学生が時間的に難しいことを理由に辞退したが、第4回セミナーを機に新しく入った2名を加え、合計10名（留学生2名）で後期の IF@N 実行委員会活動を行うこととなった。

IF@N 実行委員は、例として下記のような様々な役割を担った。

- ・フォーラム企画（テーマ設定、ポスター作成、広報、参加者募集、参加者との連絡、来賓教職員との連絡、プログラム作成、アンケート準備、開会式・閉会式、昼食、懇親会等）
- ・フォーラム運営（受付、会計、会場設営、司会等）
- ・分科会ファシリテーション（プレゼンテーションやディスカッションの流れを準備し、スムーズかつ活発な討論を促す）
- ・報告書の作成

後期の IF@N であるが、今年度はミーティング開催の時間と場所を予め設定した。9月より毎週水曜日の17時～19時とした。第1回ミーティングから IF@N イベント当日を迎え、その後の振り返りや報告書作成を終えるまで19回のミーティングを持った。分科会の準備についてはコーディネーターが個別指導をした。また実行委員長と副委員長に対し、全体ミーティングの前にコーディネーターとの打ち合わせを持ち、進行が円滑に進むように心がけた。

2012年度の第3回 IF@N は11月10日（土）に行われた。メインテーマは、「グローバル・メンバーになろう！」で、分科会テーマは「キャンパスライフ：充実した大学生活とは？」、「ジェンダー：国際的にジェンダーを考える～恋愛・結婚の視点から～」、「文化：画一化される社会（失われていく伝統）をどう捉えるか？」、「英語教育：日本の英語教育を根本から見直す」、「国際政治・社会：領土問題はなぜ生じるのか？～対立から協調を目指して～」の5つであった。当日は実行委員10名を除いた合計29名の参加があった（うち留学生9名）。7月の公開ワークショップ（第4回セミナー）をきっかけに他大学の学生とつながりができていたことから、このときの参加者にも IF@N への招待をしたため他大学からの参加も8名あった。

IF@N のイベントが終わってからは、準備や運営についての振り返りと、前期からの MEIPLES の活動の振り返りを行い報告書を作成した。前期のセミナーで行った体験学習のアクティビティをもう一度やりたいという要望や、他のアクティビティをファシリテートしてみたいという声があり、MEIPLES>Returns と題して12月に2回ミーティングを行った。

### 3. 学生へのフォローアップ調査の結果と考察

今年度の IF@N 終了後のミーティングの際に行った、MEIPLES 全体の活動を振り返っての感想や意見などを各自に書いてもらったもの、MEIPLES メンバー5名に対し個別に行ったインタビューからまとめた結果を提示しつつ、MEIPLES の効果や運営について考察する。

#### 3. 1 参加理由と参加者

本プログラムの参加者についてであるが、当初申込みをした学生は15名であり、留学生8名、一般学生7名とほぼ同数であった。本プログラムの主催が留学生センターであり、国際交流担当の関係者が周知を行ったため、より多くの留学生の目にとまったと考えられる。留学生もこのようなプログラムに興味があるということがわかった。

MEIPLES に参加した理由は表2のとおりである。一般学生にとっても「グローバル・リーダーになりませんか？」「グローバル・メンバーになろう！」というキャッチコピーは魅力的であったようである。グロー



表2 参加理由

キャッチコピー	・売り文句の「グローバル・メンバーになろう」っていうのがぐっときた
	・グローバル・リーダーになりたかった
国際交流活動の場を広げる	・国際交流の活動を広げたかった
	・国際交流の経験をどう活かすかということについて学べる場だと思った
チームでの活動	・皆でフォーラムを作っていくことが好きだった
	・多様な文化に触れながら、チームで企画を創り上げていきたいと思った
新しい自分の発見	・普段学べないことが学べると思った
	・異文化交流についての自分の認識を一から見つめ直すことがしたかった
その他	・自分の専門にも繋がると思った

バル・リーダーを育成するセミナーやノウハウを学ぶ機会が大学には少なく、他にはない新奇性が功を奏したといえる。一般学生の国際交流活動の履歴をみると、元々国際交流に関心の高い学生が多かった。実際にヘルプデスク、ESS、コーヒアワーなど、日常的に英語を使用したり、外国人と接する活動に参加している学生が多く、はじめから何かを学びたいという意識が高い。これまでの実践経験を活かし、さらに踏み込んだ活動がしたい、あるいは理論を学びたいといったことも参加の理由としてあった。実は、学生募集のちらしには、「グローバル・リーダーになりませんか？」などという目にとまるコピーを掲載していたものの、その詳細についてはとくに明記しなかった。しかしながら、参加した学生にとっては、何か新しいものを見つけることができるのではないかと、おもしろいものがあるのではないかと逆に想像をかきたてられたようである。

予め、全てのプログラムに参加できることを申込みの条件としていたものの、開始してみると継続しての参加は難しいので参加を取りやめたいと申し出る学生が数名いた。これらの学生は、大学院生、留学生、就職活動など他の活動とのバッティングを心配する学生などであった。最終的に後期にスタートしたIF@N実行委員メンバー10名は、学部2、3年生の一般学生が最も多くなり、留学生は2名、大学院生が1名であった。一般的に、1年生は入学したばかりでこのような活動に参加する準備ができていない、あるいは、授業数が多い、4年生は就職活動や卒業論文などで忙しい、大学院生は研究活動で時間的余裕がない、留学生は授業の予習、復習のほか、アルバイトにも時間を費やす、などそれぞれの学年や身分でこういったプログ

ラムに継続して参加することは容易ではないと想像される。実際に、大多数を占めた2、3年生のメンバーも他のサークルや部活動と掛け持ちしている人がほとんどであった。

### 3.2 プログラムに参加して得られたもの

本プログラムで参加学生に身につけてほしい能力や望ましいキャリアパスを前章で提示したが、具体的にはMEIPLESの参加をとおして何を得たのであろうか。一般的な講義と異なり、多文化交流、国際交流的なプログラムには、大きな目標はあっても、その過程や結果は個々によって異なり、コーディネーター側が想定していなかったようなものが生み出されるなど無限の可能性をもっている。結果を表3に示す。

変化であるが、大きく内的変化と外的変化にわけられる。内的変化として、自己成長・自己発見、自信の獲得が挙げられた。多くの参加者にとっては、活動をとおして自己を内省するよい機会となったようである。一例を挙げると、参加学生の一人は幼少のころ数年間国際的な環境におかれていたことがあり、大学に入っても英語を使用するサークルや多文化プログラムに参加するなど豊富な経験をしていた。そのため、自分が多文化理解や異文化の知識についてかなりの自信があった。しかし、初回のセミナーでレクチャーを受けたとき、そういった自分の自信があくまでも自分の枠の中で捉えていたことがわかったという。セミナーではいくつか体験学習の手法を取り入れたが、多文化を体験したあとで、理論的な説明を受けることにより、自分のそれまでの体験や考えを客観的にみることができるようになったのではないかと考えられる。

今回の経験が自信につながったと振り返った参加者

表3 参加して得られたもの

内的変化	自己成長・自己発見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新しい自分を見つけることができた</li> <li>・課題が見つかった</li> <li>・視野が広がった</li> <li>・今までの考え方が枠にとらわれていたということが再認識できた</li> <li>・自分の勘違いをとっぱらった</li> <li>・一人の人間として成長できた</li> </ul>
	自信	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スキルを習得したことにより、自分自身に自信が持てるようになった</li> <li>・初めてのことでちゃんと準備すれば、ある程度はできるという自信になった</li> <li>・司会を経験したことで、大人数の前での話しがしっかりと落ち着いてできるようになった</li> </ul>
外的変化	スキル・知識の習得	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先輩方のファシリテーターのうまい姿をみて勉強になった</li> <li>・コミュニケーションの取り方を学んだ</li> <li>・ミーティングの仕方が勉強になった</li> <li>・ファシリテーション能力を学んだ</li> <li>・事務的な作業、手順、実務力、計画立案・実行方法、問題対応能力が身についた</li> </ul>
	対人関係能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・より寛容になれた</li> <li>・自分の意見を言いつつ、他人の意見を否定するのではないような態度を取れるようになった</li> <li>・チームワークの作り方を学んだ</li> <li>・自分の役割だけでなく、他の人のことを考えること、企画者の目線だけでなく、参加者にとって分かりやすいように企画を作っていくことを学んだ</li> <li>・声に出す言葉の重みを学んだ</li> <li>・キーパーソン、ムードメーカーがいると一つにまとまっていく感じがする</li> </ul>
	仲間の獲得、人との出会い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学部を超えた繋がりができた</li> <li>・留学生の友人が増えた</li> <li>・今まで出会わなかった人達と出会えた</li> </ul>

もいる。一から自分達で準備し、責任のある仕事を担当し、やり遂げることによって、達成感だけでなくやればできるという実感をもつようになることが考えられる。IF@Nのような活動では、サークルや学会での発表と同じような感覚を体験でき、個々が今後の様々な活動場面において自信をつけるトレーニングにもなっているといえる。

外的変化としては、本プログラムとして意識して取り入れたスキル・知識の習得といった実務能力が向上したと振り返った者も多かった。MEIPLESにおいて、メールの書き方、ミーティングの進め方、議事録の書き方、など体験しながら習得できるようにしたが、実際にIF@N実行委員としての活動が始まった際に、役に立った部分も多かったようである。メールや議事録の書き方については、項目立てて書くこと、一文を短く書くこと、主語述語を明確にすること、若者ことばや省略言葉は避けること、明確な表現や正しい日本語を使用するよう心がけることなどを伝えた。コーディネーターにとっては当たり前のことであり、ここまで指示すべきか迷ったところもあったが、意外にも、こういったレクチャーは誰も教えてくれなかったので大

変勉強になったと振り返った者が多かった。

また、他のメンバーとの協働作業をとおして学んだという学生もあり、学びあう環境が提供できていたのではないと思われる。初心者や低学年生にとっては、第二回から引き続き実行委員として活動している者や大学院生、高学年生からスキルを学ぶよい機会であった。このような活動をとおして、IF@N当日、ファシリテーターとして実践することが容易になったのではないと思われる。

対人関係能力ともいえる能力が身についた答えた参加者もいた。自己理解だけでなく、他者を理解し、協調していくことの大切さを学んだようである。国際交流活動というと、一步間違えれば、自己主張をしすぎるあまりに、他者との協働作業が困難になる危険性を含んでいるが、参加者の多くが、チームワークの重要性を理解していたようである。ミーティング時においても相手のことをよく聴き、理解し、その上で自分の意見を伝える姿が観察された。多様な文化背景をもつ者同士が集まるなかで、多様な意見に寛容になること、相手の意見を否定せずに、自分の意見を伝えることを学んでいたといえる。Adler (1991) は、単一文化の

チームは業務遂行に対して平均的な成果を出す、多文化チームは、非常によい結果を残すか非常に悪い結果を残すかのどちらかであると述べている。本プログラムは、参加者10名のうち留学生は2名であったが、一般学生についても、予め互いに知り合いであった者は少なく、学部、学年、出身地域、性別など様々なタイプの学生であり、ある意味多文化チームであったといえる。そのようななか、上記のような結果であったことからみて、非常によい結果をもたらしたのではないかと推察される。

### 3. 3 学生によるプログラムに対する評価

本プログラムに対する評価についてであるが、形式について授業とサークルの中間のようなものと例えた者、授業で学べないことがあると述べた者がいた。それは、授業のように講師が一方的に教えたり、単位を出したり、試験を課すなど、評価したり、学習到達度をはかるものでもない一方、サークルのようにミーティング参加が自由であったり、学生だけで物事を決めたり、進めたりするものでもない。どちらにもいないコーディネーターも特殊な存在である。

本プログラムで得たことを将来的にどのように活かしたいか、という問いに対しては、積極的に活かしたい、活かせると答えた者が多かった。このプログラムに参加して留学を決めた、と答えた学生もいる。最終的に名古屋大学の交換留学プログラム制度を利用し次

年度から留学する学生が4名出たことは、注目に値すべきことであろう。もちろん、プログラムに参加する以前から留学を希望していた予備軍が多かったということであろうが、参加することにより、他の参加者から刺激を受け、多文化や留学生と接することで留学を決断したり、留学に向けた準備に身が入ったのではないだろうか。本プログラムで培った知識や経験から今後、留学してもやっていけるという自信をつけたことは間違いない。そのような意味で、本プログラムは十分に意義のあるものである。

### 4. まとめと今後の課題

以上、名古屋大学グローバル・リーダー育成プログラムの実践について、三回分の概要説明と参加学生へのフォローアップの結果からの考察を中心に報告した。プログラムを通じて目指す能力について、参加者の多くは習得しており、コーディネーターの試みはおおむね達成されたといえる。ここでは、まとめを行いながら、今後の課題について述べる。

プログラムの内容や実施方法についてであるが、今年度はミーティングの開催場所と時間を固定したため、学生にとっても混乱がなくうまく機能した。コーディネーターにとっても先々の予定が立てやすかったため、今後もミーティングの時間と場所は固定していく方向で調整したいと考える。毎回のミーティングの

表4 MEIPLES に対する評価

形式 進め方、内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・売り文句の「グローバル・メンバーになろう」というのがぐっときた</li> <li>・授業とサークルの中間点</li> <li>・作り上げていく楽しさがあった</li> <li>・講義では学べないことがあった</li> <li>・ミーティングの曜日と時間が決まっていたのがよかった</li> </ul>
IF@N	<ul style="list-style-type: none"> <li>・IF@N はただ開催するだけでなく、MEIPLES で学んだことを活かす場でもあった</li> </ul>
コーディネーター	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コーディネーターの先生の方向づけがよかった</li> </ul>
将来の糧、活かし方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・留学に活かせる</li> <li>・いろんな実践の場をみつけていきたい</li> <li>・留学することを決めた</li> <li>・ここで学んだことは実際これからの社会や大学生活で必ず役に立つものだと思う</li> <li>・ここで学んだことをすぐに活かせるわけではなく、経験を積み重ねなければならないが、良い練習の機会だった</li> </ul>
全体の感想	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初めからMEIPLESに入れていればよかったと後悔。普段からアンテナをはっておくことも大事。途中からの参加でも得られたことはとても貴重であり、これからも大切にしていきたい</li> <li>・自分より若い学生にやる気と行動力があり、それが自分のモチベーションを上げる一つの要因となった</li> <li>・多様な背景を持つチームとして、考えていることが違っても最終的に一人の考え以上にいい形で目標を達成できることが分かった</li> <li>・みんなで協力して一つの目的のために努力することが楽しかった</li> </ul>

進め方として、第2回から実行委員長と副委員長とコーディネーターの事前ミーティングを持つようにしたり、アジェンダと呼んでいる議題についても事前に作成してもらい、チェックするようにしたがこれも有効であった。

コーディネーターがどこまで介入するかについては、コーディネーター間でその都度意見交換し、意見を共有するようにした。学生が主体となり、自由な発想を促すことを重視しつつも、大学のプログラムである限り、ある程度の方向付けは必要との認識に立ち、かつ、教育的な視点を持ち配慮することを心がけた。また、分科会のテーマ決定や話し合う内容、資料、進め方について、ミーティング時や個別の時間を設け発表をしてもらい、アドバイスするようにした。コーディネーターが適切な介入を行うことにより、強制するのではなく、別の視点から物事を考えさせたり、学生たちの学びを促進するようにした。コーディネーターにとっても、どのようなアドバイスをすれば学生にとって最もよいか、やり過ぎてはいないか、あるいは、適切にフォローができているかについて常に気を配ったつもりであるが、コーディネーター側でも調べたり、勉強しなければならない点も多く、内省も必要であると感じた。その点、コーディネーターが3名体制であったことは重要であると考ええる。

今回の経験を今後活かしていきたいという意見が多かったが、学内においても大学として本プログラムのような国際交流プログラムを実践の場として提供していく必要があるだろう。参加者にとっては、MEIPLESは継続しており、一回に終わらせないことが重要で、さらなる経験を積む場の提供、フォローアップが不可欠である。例えば、留学をした学生が帰国したときに、学生の力を伸ばし活躍する場を提供することが必要であろう。そのような意味でも、学内の他の国際交流活動、担当者との協力、連携が必要となってくる。学生のプログラム参加が即グローバル・リーダー育成に結びつくわけではないし、ここでの経験がさらに大きな挑戦へとつながっていくことを考えると、学生が在学中にどのような経験をし、名古屋大学の国際化にどのような貢献をするのか、卒業し社会に出た後でどのように活かされていくのか、今後も縦断的な調査が必要である。つい最近、第2回の実行委員からIF@Nの同窓会を開きたいと申出があり、3月上旬に実施することになったが、このような学生からのアイデアを一

つの成果と捉え、フォローアップしていくことも必要であろう。

学生からは、来年度以降もMEIPLES継続の強い要望があった。今回は名古屋大学全学同窓会支援事業の助成を得て開催することが可能となったが、大学として予算化し安定してこのようなプログラムを提供することが求められる。単位化やインターンシップの一部として授業化することも考えられるが、それに捉われない授業ではない形の利点もある。外部講師を招いての公開ワークショップは、学外の学生も参加できるなど授業でないため実現が可能であった。ただ、国際交流はどうしても教育・研究の範疇から外れた「遊び」としてとらえられる節があるため、国際交流プログラムを教育プログラムとして位置づけることも重要である。どのような形式にするとベストであるかは今後の課題である。

広報と参加者募集であるが、この3年間で、潜在的に参加希望者はいるという感触を得た。これまでの参加者のなかには、ポスターで偶然知った、コーディネーターが誘ったためにこの情報を知ったという学生も多かった。広報周知には関係部局の掲示や、関係者などへの案内を行ったが、より多くの学生が情報入手しやすいような広報手段を考えていかなければならない。留学生センターは敷居が高いといわれることもある。まずは留学生センターに足を運んでもらうような工夫も必要となろう。もう一つの課題として大きなものは、どのように実行委員の文化の多様性を増やしていくかである。MEIPLESは、日本、モンゴル、韓国、中国出身者で構成されていたが、IF@N実行委員は2人中国出身以外はすべて日本人であった。日本人学生にとっては、専攻や学年の違いによる多様性については意識されたものの、文化の違いとして意識されることが少なかった。マジョリティーである日本的な流れで進んでいった傾向があるかもしれない。どのように様々な学生を巻き込んでいくかが課題である。

## おわりに

通年のプログラムとしての学びや経験から、学生たちにとって何らかのアイデンティティの変容を促したことが伺えた。今は、本人たちもそれが何なのか明確に気づいてはいないかもしれないが、今後直面するであろう様々な出来事を通じて、行動として現れてくる



だろうし、そのときに自分の成長について気づくときが来るのかもしれない。何をもってグローバル・リーダー、グローバル人材とするのかは様々で、実は共通した定義がある訳ではない（谷口他2010, 中本2012, 石渡2012）。しかし、我々が当初目的としていた多文化理解能力・コミュニケーション能力の涵養、国際社会で活躍できる能力の養成、課題達成の能力の養成については、ある程度達成されたと考える。

## 謝辞

本プログラムの実施に際しては、学内だけではなく学外からも来ていただいた講師の皆様、近隣の大学関係者にも様々なご支援、ご協力をいただきました。また、名古屋大学全学同窓会支援事業の助成がなければ実施ができなかったものであります。この場をかりて関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

## 引用文献

- Adler, N. J. (1991). *International dimensions of organizational behavior* (2<sup>nd</sup> ed.). Boston, MA: PWS-KENT.
- 石渡嶺司（2012）「座談会 大学教育と『グローバル人材』養成－その実態と課題について」独立行政法人労働政策研究・研修機構編『日本労働研究雑誌』12月号, No. 629, pp. 67-82
- 中本進一（2012）「グローバル人材育成と大学の海外派遣プログラムに関する一考察」埼玉大学国際交流センター編『国際交流センター紀要』第6号, pp. 15-24
- 谷口真美・入江崇介・唐澤龍也・飯田信一・鈴木康之（2010）「グローバルリーダーとは 研究と実践の双方からみたそのあり方と開発」経営行動科学学会『経営行動科学学会年次大会：発表論文集』13, pp. 29-31
- 津村俊充・山口真人編（2005）『人間関係トレーニング [第2版] 私を育てる教育への人間学的アプローチ』ナカニシヤ出版